

羽村市史編さんだより

令和4年4月

第29号

伸びゆくはむら

特集
羽村の春祭り

東京・羽村
八雲神社春季例大会

今号の内容

News / 資料紹介 /
部会と市史編さんの足あと /
コラム「ちっとなべえ」

特集 羽村の春祭り

羽村の春といえば、やっぱり春祭り。春祭りのはじまりは、^{えきびょうたいさん}疫病退散を願う夏の祭りだったそうです。今回の特集では、今年も新型コロナウイルスに注意しながら市内各地で行われた“春祭り”に関する話題を紹介します。

はじまり

春祭りの起源は牛頭天王を祀る天王社の祭りです。市域の川崎では、明和6(1769)年に蔓延した^{まんえん}疫病^{えきびょう}封じを願って、津島(愛知県)から牛頭天王を^{かんじょう}勧請^{ぶんれい}(分霊を迎え入れて祀ること)したと伝えられています。また、^{あずまちよう}東町では文政年間に流行した疫病の退散を願って京都から牛頭天王を勧請したとされ、ほかの地区でも江戸時代の半ば頃までには牛頭天王が勧請されて、それぞれの^{うじこい}氏子域で祭りが行われるようになったと考えられています。

この天王社の祭りは疫病が流行しやすい夏に行われるもので、その当時は8月1日に行われていました^{注1}。また、明治の^{しんぶつぶんり}神仏分離以降は、祭神は牛頭天王からスサノヲノミコトになります^{注2}。

神輿の渡御

神輿は神様の乗り物です。祭りでは、^{こし}輿に神様を遷して^{うつ}辻や^{みきしょ}神酒所に渡ります。その際、神輿を上下に揺らして、ひとしきり練りますが、この練る所作のことを市域では「もむ」と呼んでいます。神輿を激しく暴れさせ、周りで盛んに^{ぎおんぼやし}祇園囃子を囃すことで、疫病神を追いはらうのです。



明治期の^{じんじやごうし}神社合祀^{注3}以前は、八雲神社の多くは小さな^{ほこら}祠で、祠がない場合は神輿そのものを祠として祀っていました。現在の祭りでは、川崎では奥多摩街道近くの「下の^{しも}天王様^{てんのうさま}」へ神輿が渡御し、東町では旧神輿堂付近で神輿が山車に近寄って練る「もみ合い」が行われます。また、加美町ではオンベエ(御弊)と呼ばれる旧社地近くの辻で神事が行われます。かつて祀られていた地が神事などを行う重要な場所として、今の祭りの中に伝承されているのです。



^{注1} 8月1日に行われていた祭りは、大正3、4年頃、養蚕の繁忙期(5月の節供を過ぎた頃から9月下旬頃まで)を避けるために4月15日に繰り上げられました。その後、会社勤めの氏子が増えてきたため、昭和36年頃からは現在と同じ4月の第二日曜日とその前日の土曜日に行われるようになりました。

^{注2} 慶応4(1868)年の神仏判然令により京都祇園社が「八坂神社」と改称し、祭神が牛頭天王からスサノヲノミコトになりました。それに伴い牛頭天王を祀る全国の神社も、八坂神社、八雲神社、天王神社と社名を改めました。

^{注3} 明治末期より進められた神社合祀政策により、小さな神社は合祀廃社されました。現在、羽村市内に八雲神社を氏神として祀っている地区はなく、氏神社の境内や本殿に合わせて祀られています。

新しい祭りのすがた

昭和 20 年代以降、市域の市街地開発が進み、^{うじこ}氏子の居住域の広がりにあわせて、神輿が渡る範囲も拡大していきました。平成 31 (2019) 年 4 月の春祭りでは、川崎の神輿は青梅線を越えた東側の地域まで巡行し、また、東町の神輿は多摩川を越えて右岸の地域まで巡行しました。

その一方で、昭和 50 年ごろ、新しい町内会の発足をきっかけにして新たに祭りを創出した町内会もあります。従来から付き合いがあった神社の^{うじがみ}氏子や同じ町内の経験者たちに囃子を習い、自分たちで山車や神輿を造って春祭りを行うようになりました。

また、^{うじがみ}氏神の春祭りと町内会自治会で催す春祭りと同じ時期に、多摩川沿いでは「花と水のまつり」が行われます。昭和 25 (1950) 年にスタートした桜まつりに平成 14 (2002) 年からチューリップまつりが加わったもので、市外からも多くの方が訪れる観光イベントとして実行委員会形式で開催されています。



山車曳き合わせと囃子の競演

かつて、山車は氏子域を越えて巡行することではなく、隣接する地区境での^ひ曳き^あ合わせでキッカセを行っていました。キッカセとは「聞き合わせ」のことで、互いの囃子を聞き合うと同時に、いかに相手方を巻き込んでテンポを崩すかを競い合うものです。加美町ではスライとも呼び、地区境で行っていた当時は勝った方はその場から動かず、負けた方が動くというルールがあったそうです。

こうしたキッカセは、東町と奈賀町の曳き合わせに川崎が加わって三町で行われるようになりました。平成 16 年には五ノ神が加わり四町に、平成 17 年には加美町が加わり五町に、そして平成 19 年には小作本町が加わって、六町の山車曳き合わせによる囃子の競演が実現することとなりました。

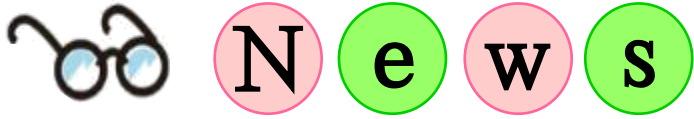
これからの祭りのかたち

江戸時代に疫病退散を目的としてはじまった祭りが、時代を経て受け継がれる中で、伝統的な春祭りを担う人たちと新たに加わった人たちがともに花見の季節を楽しむ、今の“春祭り”にかたちを変えていきました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によって、春祭りはさらなる変化を強いられることとなっています。感染拡大が始まってから三度目となるこの春、市内各地ではコロナの終息を願いつつ、かたちを変えながらそれぞれの祭りが行われました。

満開の桜のもとで、神輿が大いに練り、お囃子をにぎやかに奏しながら山車が巡行する、そんな春が再びやってくることを待ち遠しく思います。



※各祭礼の呼称は、市史編さん室が平成 29～30 年にかけて行った春祭り悉皆調査の記録に基づいて記述しています。



2年ぶりにゆとろぎで開催！羽村市史関連講座

令和4年2月19日（土）に、生涯学習センターゆとろぎで第7回羽村市史関連講座「羽村の気候ー市内の気候の特徴と約100年前からの変化ー」を開催しました。市民から参加者を募って開催するのは2年ぶりのこととなります。

今回の講座では、市史編さん部会で自然分野を担当する第4部会から副部会長の赤坂郁美氏を講師に迎えて、『羽村市史 資料編 自然』（平成30年度刊行）の内容に関する話題をご講演いただきました。



▲当日の会場の様子

市内の地域ごとに生じる気温差などから羽村の気候の特徴をわかりやすく解説するとともに、明治時代初期の羽村取水堰の記録である「羽村日誌」や個人宅の養蚕飼育日誌、農業日誌といった羽村ならではの史料をもとに、この100年間で羽村の気候がどのように変化してきたのかなど、羽村の気候について多様な観点からお話いただきました。

普段から何気なく感じ取っている身近な気候の変化が、様々なデータに裏付けられたものであるとの説明に、多くの参加者が納得してうなずいている様子が印象的でした。

『羽村市史 資料編』の正誤表について

市史編さん室では、これまでに刊行した『羽村市史 資料編』の正誤表を市公式サイト和市史編さん室ページに掲載しています。

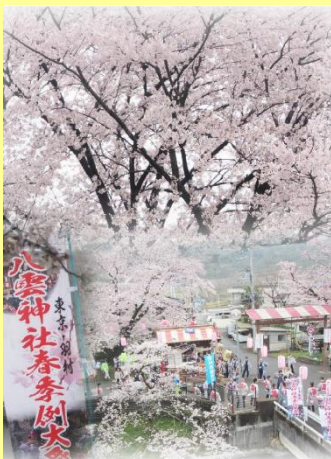
新たに修正点などが見つかった場合は、市公式サイトで随時お知らせしていきます。（<https://www.city.hamura.tokyo.jp/0000015254.html>）

▼公式サイトは
こちらから



表紙の写真

羽村の春祭り 祭りの一場面



「神明神社八雲例大祭」「五ノ神社八雲祭典」「八雲神社春季例大祭」「玉川神社八雲祭」「阿蘇神社八雲祭春季例大祭」「松本神社春の例大祭」「春祭り」「羽村桜祭り」「住民春祭り」「さくらまつり」……。このどれもが4月の第二日曜日に羽村市内で行われる祭りの名称です。

各氏神の春祭りだけでなく、町内会自治会が催す春祭りや観光イベントとしての春祭りなども、すべてを総称して“羽村の春祭り”と呼んでいます。この日、羽村市内は祭り一色に染まります。

今でこそ市域全体の祭りになった羽村の春祭りですが、そのはじまりは疫病退散を願う夏の祭りでした（『特集 羽村の春祭り』）。

資料紹介

今回紹介する資料は、『羽村市史 資料編 近世』から取りあげました。

「75 天明八年四月 羽村・羽村新田村鑑帳」

(『羽村市史 資料編 近世』106 ページ)

〈史料翻刻文〉

(表紙)

(前略)

一用水ハ玉川より引申候

一小物成運上ものあり

一道中付之村方ニ而ハ無御座候得共、拝嶋村江大助仕候

一農業の間男ハ薪炭附出し駄賃取又ハ野稼仕、

女ハ蚕仕、紬・木綿島織稼ニ仕候

一市場・町場無御座候

一秣場無御座候

一御林三町六反歩 但松雑木立 沓ヶ所

一百姓林 雑木立 一 式拾ヶ所

此反別式町式反七畝廿四歩 林銭上納仕候

一御巢鷹山無御座候

一玉川石川ニ而川幅三拾間程御座候

夏ハ歩行渡り
冬ハ橋渡り

一米の津出し無御座候

一御年貢米定石代金納ニ而上納仕候

一田畑川除御普請所御座候

一玉川魚漁場あり

一田場に圪樋沓ヶ所御座候

一四ッ谷上水元水門沓ヶ所あり

一玉川除御普請あり、其外大キ成御普請場なし

一野方にて賑ひ無御座候、困窮の村方に御座候

一古城跡無御座候

一家数三百拾軒

人数千式百拾人

一馬六十疋

右之通相改書上候通少 茂相違無御座候、以上

(後略)

⑦ ⑤

⑥ ③ ① ② ④

今回紹介する史料は、^{はむら}羽村の名主の家に残っていたもので、羽村と^{はむらしんでん}羽村新田の村鑑帳です。11代將軍徳川家斉が天明7年(1787)、將軍に就任した翌年に、村から^{じゆんけんし}巡見使¹宛てに提出されました。

村鑑帳は、江戸時代、領主が村のようすを把握するために村から提出させるもので、村明細帳ともいい、現在の市勢要覧に相当します。領主や代官の交代に伴い作成されますが、巡見使の派遣や日光社参などの際にも作成されました。

「一」から始まる一つ書^{ひとつがき}には、21件の項目についての有無が記載されています。羽村には家が310軒、村人は1,210人、馬は60頭とあります。日光街道沿いにある^{はいじま}拝島宿(現昭島市)の^{すけごう}助郷²の村であることも記されており、一時的に人馬を提供していたと考えられます(史料翻刻文①)。漆や綿、大豆などを税として納め³、農業の合間に男は駄賃稼ぎ、女は養蚕や機織り

をして収入を得ていることもわかります(同②③)。玉川上水の取入口があり、^{ふしんば}普請場⁴や漁場があるほか、村の用水は多摩川から引くことなども記されています(同④⑤)。一方、城跡はなく、市場や町場、^{まぐさば}秣場⁵、郊外のため賑わいもないとあります(同⑥⑦)。史料の後略部分には、武蔵野新田内にある羽村分の羽村新田について書かれています。全て畑で、民家や普請場はないと記されています。

このように、『羽村市史 資料編 近世』では当時の村の特徴や人々の暮らしが読み取れる史料を紹介しています。

¹ 將軍の代替りごとに派遣される。幕領だけを監察する御料巡見使と、民衆と領主を監察する諸国巡見使がいた。

² 街道の宿駅が常備している人馬(伝馬)では負担しきれない時、補助的に人馬を提供する村のこと。

³ 羽村町教育委員会『羽村町史史料第七集 村絵図・村明細帳』

⁴ 土木工事や建築工事現場のこと。

⁵ まぐさ(牛馬の肥料とする草)を刈る所。

部会と市史編さんの足あと

[1月] カワラノギク調査 [第4部会(自然担当)]
市内の小正月調査 [第5部会(民俗担当)]

[2月] 7日(月) 第20回市史編さん本部会議
19日(土) 第7回羽村市史関連講座
20日(日) 第2部会(近世担当)会議
21日(月) 部会長会議
24日(木) 市内個人宅の蔵調査

[第3部会(近現代担当)・第5部会(民俗担当)]

[3月] 遺跡発掘現場見学 [第1部会(原始・古代担当)・第4部会(自然担当)]
30日(水) 第14回市史編さん委員会



▲蔵調査の様子

コラム

ちっとなべえ

第29回「発掘現場の秘密道具」

市内の遺跡発掘調査現場へ行き、確認・記録をしていた時のことです。ふと、作業員さんの近くに並んだ道具に目がとまりました。移植ゴテ、いしよく両刃鎌、竹へらに…おたま、パフェスプーン！どれも土を掘るための道具です。

建物跡などの遺構を調査する際には、土を注意深く見分けて丁寧に掘り下げする必要があります。ちゅうけつ柱穴を掘るにはおたま、指が入らない石の隙間の土を掻き出すなど細かな作業にはパフェスプーンを使うとはかど捗るのだそうです。移植ゴテの中には、ペンチで曲げて手に角が当たらないよう工夫されたものもありました。それらを秘密道具のごとくセットし、使い分けながら掘り下げては記録、これを毎日繰り返していきます。

現場の作業は天気によ左右されます。前日に雨が降ると、掘った所に水がたまり、その水を処理しないと次に進めません。今年の1月、2月は羽村にも雪が降りました。遺構の穴には氷が張るほどで、とにかく寒い。3月、暖かくなったかと思えば、強い風で土埃が舞う。そんな中でも、身近な道具を駆使しながら根気強く作業する姿を見て、発掘調査現場の記録を大切に活用していきたいという思いを強くしました。



※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。